

ここより永遠に

ここより永<sup>と</sup>遠<sup>わ</sup>に

八神大輔

武は、病室のドアの前に立っていた。

このドアの向こうに、彼女がいる。

……やはり、会わないほうがいいんじゃないのか。

この期に及んで、それでも背を向けて逃げ出したくなる心  
を支えていたのは、自分を送り出してくれた沙夜の笑顔だっ  
た。

深呼吸をひとつして、武はドアに手をかけた。

「……たかひさ？」

それは二日前のことだった。沙夜の部屋で、武はいつもどおり夕食をすませた。今は沙夜が洗い物をしている音を、珈琲を飲みながら聞いている。

こうしていると、もう夫婦みたいじゃないか。  
ふとそんなことを考えて、思わず笑みがこぼれたところを、沙夜に見られてしまった。

「どうしたの、一人でニヤニヤして」

「……いや、なんでも」

「なあに？」

「幸せだなあってことさ」

照れ隠しに武はそう云って笑う。いつもならここで沙夜も少し照れたような、けれどとても嬉しそうな顔で笑ってくれるはずなのだが、今日はなぜか悲しげに、小さく微笑むだけだった。

「……沙夜？　どうかしたのか？」

「ううん……」

言葉を濁し、沙夜は武の側に腰を下ろす。そして、そのまま武の肩にこつんと頭を乗せた。武は沙夜の肩を抱いて、その白い顔を覗き込んだ。

「どうしたんだ？　具合でも悪いのか？」

「そうじゃないの。ごめんなさい。……ただ」

「ただ？」

「幸せだなあって」

「……沙夜？」

言葉とは裏腹に、沙夜の声は哀切に満ちていた。

ふと、武は遠い過去のことを思い出す。「あなたに会えて嬉しかった」そう呟いて、雪の日に逝った少女……。まさか、沙夜の身にまた異変が？　武が不安と恐怖に心臓を鷲掴みにされたそのとき、沙夜がメモ用紙の切れ端を

差し出した。

「松本市総合病院……？」

メモに書かれていたのは、その病院の名前と住所、電話番号。

意図がわからず、武はメモから顔を上げて沙夜を見つめた。沙夜はやはり悲しげな顔をしたままだったが、何かを決意したように唇を噛むと、次の言葉を紡ぎだした。

「高原さんが、そこにいるわ」

「万葉が!？」

高原万葉。

その名前が、武の心を震わせた。

太祖との戦いの後、行方不明になってしまった彼女のことを、考えなかったわけではない。しかし、あえて意識の外に置こうとしていたのではないか、そう云われると武は否定できなかった。

人の気持ちはどうしようもないとはいえ、彼女の千年の想いを武が切り捨てたことは間違いない。星の並びが変わるほど時が流れても逢いにいく、その約束もまた。そのことが、武の心に棘を残していた。

「……どうして……？」

思わず、声が震えた。

どうして、沙夜が万葉の居場所を知っているのか。

どうして、俺にそのことを教えたのか。

……どうして、今のままではいけないのか。

武の胸に去来した様々な想い。しかし、その答えは、沙夜の言葉を待つまでもなく、武自身もわかっていたはずのものだった。

「私たちは、高原さんにとっても大きな借りがあるわ」

「……」

「彼女が助けてくれなければ、私たちはきつと死んでいた。……いいえ、死よりも恐ろしい、太祖の新たな憑坐として、呪われた生を強いられていたかもしれぬ。それなのに、彼女の

生死すらわからないなんて……」

「……」  
「だから、私の方で調べたの。ごめんさい、勝手な真似をして。でも、もし最悪の事態になっていたら……そう思うと、云えなかった」

万葉の死。それはあり得ない事態ではなかった。いや、むしろ最も確率の高いことだったと云えるだろう。

もしそうなっていたら、きつと武は激しい自責の念にさいなまれるに違いない。だから沙夜は、とりあえず生死がはっきりするまでは、武に黙って万葉を捜していたのだった。

武にも沙夜のその気遣いはよくわかる。だから、彼女を責めるようなことはしなかった。ただなにも云わず沙夜の肩を抱いて、その話に耳を傾けていた。

「……幸い、彼女は生きていてくれたわ。ただ……」  
「ただ？」

言いよどむ沙夜の姿に、武は新たな不安を抱かずにはいられなかった。そう、万葉は病院にいるという。まさか大きな怪我をしているとか……。

「外傷はないの……。でも、心が……」  
「心？」

「そう、誰とも口を利かず、ただじつとあの剣を抱いているだけなんですって。まるで心をどこかに置き忘れてしまったみたい……」

「そんな……」  
武は軽い目眩すら覚えた。自分の裏切りが、万葉をそこまで追い込んだのか？ それともほかに何か理由が？

蒼白となった武の手を、沙夜がそっと握る。その手にすぐりつくように、武は強く握り返した。今の自分のなにより大切なもの。けれどこの手のぬくもりは、罪の証なのか。

「落ち着いてね、武」

「……ああ、大丈夫……」  
そう答えながらも、武の声は震えていた。励ますようにそ

の手をさすりながら、沙夜は言葉を続けた。

「詳しいことはまだよくわからないの。でも、このままにしてはおけないことは間違いないわ。そうでしょう？」

「そう……だけど……」  
「彼女のところに行つてあげて」

「沙夜!？」  
武は思わず顔を上げて沙夜を見た。そこには迷いの表情はなく、強い決意の色だけがあった。

「なにができるのかはわからない。でも、高原さんを救えるのはあなただけ、それだけは確かだわ」

「そんな……そんなこと、わからないよ。それに、万葉を救うために沙夜が犠牲になるんじゃない、それじゃなにも変わらないじゃないか」

「犠牲？」  
きよとん、という顔を沙夜はした。それから、くすつと笑うと、もう一度武の手を取った。

「いやだ、私、自分から身を引いて、高原さんにあなたを譲ろうなんて考えてないわよ」

「……え？」  
「それとも、そうしてほしかった？」

「そんなわけないだろう！ 沙夜と別れるなんて、考えられないよ！」  
「私もそうよ」

云いながら、沙夜は武の首に腕を回した。武も沙夜の体を強く抱き返す。愛おしい、ただその想いが二人を満たしている。

「私、本当に幸せよ。でも、その私たちの幸せのために、傷ついた人がいるのなら、それはとても悲しいことだわ」

「……」  
「だから……」

「わかった、わかったよ、沙夜」  
沙夜を抱く腕の力を強めつつ、武はその耳元で囁いた。

「俺は沙夜を選んだ。そのことを絶対に後悔なんてしない。だからこそ、けじめをつけてこなきゃいけないんだな」

「武……」

「行ってくるよ、そして、必ず帰ってくる。約束だ」

「ええ…… 待ってるわ。あなたがなすべきことをなして、帰ってくるのを……。私は、大丈夫だから……」

「沙夜……」  
「信じてる……」

2

まだ吹く風に寒さの残る三月。今年は桜が少し遅れているようだ。そんなことを考えながら、武は夜道を歩いていった。「万葉に初めて逢った日は、確か桜が怖いくらいに咲いていたっけ……」

ふと夜空を見上げる。この一年、たった一年の間に起こったためまぐるしい出来事が、次々に武の脳裏を駆け抜けた。

「この季節に、もう一度俺は万葉に出逢う……。そして……俺は……なにをするんだ？」

沙夜に告げた言葉に嘘はなかった。けじめは、つけなければならぬ。そのために、万葉に逢いにいく。そのことにもはや迷いはなかった。

けれど、逢って、どうするのか。詫びるのか。もう一度突き放すのか。それとも……。  
どんなに考えても、今は答えが出なかった。

\*

「…… たいま」

「あ、たけちゃん、お帰りい。今日は早いね」

「ほおんと、今日もてつきり午前様かと思っただけ」

沈んだ気持ちで帰宅した武を迎えたのは、いつも通りの齋母子の「いじめ」だった。

もちろん、悪意はない。しかし、今では納得したこととはいえ、やはり「振られた」ことになった菜と、娘の恋を応援してきた母としては、多少の意地悪もしてみたくなるのだろう。

実際には、武と沙夜、二人の関係を認めてくれていた数少ない人々だ。武もそのことはわかっているのに、腹を立てたりはしない。むしろ気持ちが悪く、ただに、菜たちの明るい声は彼の心を和ませた。

「人聞きの悪いこと云わないでくださいよ、節子さん。午前様なんて、したくないでしょう?」

「そうだったかしら? だとしても、たまにはうちで晩御飯食べてほしいわね。菜と二人じゃ寂しいわ」

「そうだよ。あ、先生も連れてくればいいじゃない」

「そうね、人数多い方が楽しいわ」

「……考えておきます」

沙夜に云えば喜ぶかもしれないが……でもそれじゃ家庭訪問にしか見えないよなあ、と武は考えて、苦笑した。

そしてそのまま階段を上がろうとしたところで、武は明日からの予定を思い出した。

「あ、そうだ、節子さん。俺、明日からちよつと旅行に行きますから」

「旅行?」

「なにそれ? もしかして先生と行くの? あたしも行くつ!」

「違うつて。一人旅だよ」

「…… なにか、大事な用事が?」

小首を傾げて、節子が武に尋ねた。…… やっぱりこの人は鋭いな。

「はい」

「わかったわ。気をつけてね」

「はい」

武の瞳の真剣さを読みとったのか、節子はそれ以上追求しようともしなかった。

しかし、菜の方はそれでは収まりがつかない。二階に上がる武についてきて、そのまま部屋にまで一緒に入ってきた。

「どういふことなの? 先生と何かあった?」

心配そうに眉をひそめて、武の顔を覗き込む菜。武がただならぬ決意を秘めていることを、菜も感じ取っていた。

そのいつでも自分の身を案じてくれる姿に、武は少し心が痛んだ。

沙夜とのことを打ち明けたとき、菜は泣いた。泣いて、泣いて、泣いて、そして最後には笑顔で、こう云ってくれた。あたし、沙夜先生もたけちゃんも大好きだから、幸せになつてね。

改めて、武は思う。人を愛することの難しさを。好きな人の側にいたい、そんな当たり前のことが、どうしてこんなにも人を傷つけるのだろう……

「たけちゃん?」

「…… ああ、大丈夫、沙夜とはなんともないよ」

「じゃあ?」

「…… 万葉に、逢いにいくんだ」

「万葉……さん?」

菜の顔色が、さっと変わるのがわかった。武は沙夜から聞いた話を、ざっと菜に話して聞かせた。

「…… ということなんだ。正直、俺になにができるのかわからない。でもこのままには」

「あたしは、反対よ」

驚くほどきっぱりした口調で、菜は武の言葉を遮った。その常ならぬ態度に、武は驚いた。

「菜?」

「今更万葉さんに逢つて、それでどうなるというの。たけちゃんだって、ほんとはわかっているんでしょ? 『できることなんてなにもない』つて。それでも彼女に逢いたいなんて云うのは、ただの自己満足よ」

「…… 自己満足」

そうかもしれない。万葉とのことにきっちりけじめをつけたいというのは、自分自身が気持ちを楽しみたいだけなのかも。万葉にとつても、俺との再会は痛みをもう一度繰り返すだけなのかもしれない。だけど……

「それでも、俺は行くよ」

「どうして……! そんなことしたつて、誰も幸せにはならないよ。先生だって、ほんとは行かないでほしいつて、思ってる

はずだよ」

「約束したんだ。行って、自分のなすべきことを見いだしてくる。……そして……必ず、帰ってくるって」

「たけちゃん……」

栞は涙を目に浮かべて、唇を噛んだ。しかし、武の決意は変えられないと悟ると、くるっと背を向けた。

「……知らないから」

「栞……」

「たけちゃんのばかっ！」

叫ぶと、栞はそのまま武の部屋を走り出てしまった。武は追いかけようと一瞬腕を伸ばしたが、目の前で閉まったドアを開けようとはしなかった。拳を握りしめ、溜息をもらす。そして、ベッドに腰掛けて、栞の言葉を反芻した。

「先生だって、ほんとは行かないでほしいって、思ってるはずだよ」

……そうだろうか。あるとき、沙夜に万葉のことはもういいんだと、お前との暮らしがなにより大事だと云ってやればよかったのだろうか。

違う。いや、俺が本気で考えた結果、出した答えがそれなら、沙夜も受け入れてくれただろう。だけど、自分の心から逃げるために、沙夜への想いを口実にすることなんかできない。

やはり、俺は、行くしかないんだ。

3

翌日。見送りにには沙夜と栞、そして汰一が来ていた。

汰一も栞から事情は聞いていたが、あえてなにも云わず、武の肩を叩いた。

「……じゃあ、行ってくる」

「行ってらっしゃい。気をつけてね」

そして、沙夜は微笑む。その笑顔を見て、武は自分の選択が間違っていないことを知った。

必ず、帰ってくる。わざわざ口にするまでもなく、お互いの瞳が誓いを交わす。

やがてドアは閉まり、列車が走り出した。その列車が遠く見えなくなるまで、沙夜は見送っていた。

「先生……」

「……帰りましょうか。お茶でも飲んでく？」

屈託のない笑顔で、沙夜が云う。その笑顔に、栞はどうしても云わずにはいられなくなってしまった。

「先生は、ほんとにこれでよかったんですか？ たけちゃんを行かせてしまって、本当に？」

その問いかけに、沙夜はちよっと困った笑顔を見せた。その表情は、栞にはやはり無理をしているように見えた。だから、沙夜の次の言葉も、虚勢だと思えなかった。

「……二人で、決めたことだから。こうしなきゃいけないって、そんなの……！ そんなの、おかしいですよ！ どうして、あのひとのためにそこまでしなればならないんですか？」

今の幸せを捨ててまで？」

「おい、栞、落ち着けよ」

汰一が栞をなだめようとするが、栞の耳には届かない。栞はただ涙を瞳にいっぱいためて、沙夜を見据えていた。

この子は本当に、私たちふたりのことを案じてくれている。そのことは、沙夜にも痛いほどに伝わってきた。けれど

「私たちは、なにも捨てていないわ」

「先生……」

きつと、彼女には私が意固地になっているだけに見えるの  
 だろう。そうわかっていたが、しかし、沙夜も自分の気持ち  
 に嘘をついていた、自分でも信じられないことを信じ込  
 むとしていたわけでもなかった。そのことを、どうやって説明  
 したらいいのか。もどかしさを感じていたのは、菜よりむしろ  
 沙夜の方だったかもしれない。

「もしかしたら、たけちゃんももう帰ってこないかもしれない  
 ですよ。それでもいいんですか？」

「それが彼の出した答えなら、それでもかまわないわ」

「……！」

「彼を信じてる」

「……うそっ！ 先生はやせ我慢してるだけよ！ そんなの

……そんなの……あたしはイヤだから！」

そう叫ぶと、菜は沙夜と汰一に背を向けて走り去ってしま  
 った。

「菜さん……！」

引き留めようとする沙夜の声も、もう届かない。うつむく  
 沙夜を気まずそうに軽く見やった汰一は、とりあえず菜を  
 追いかけることに決めた。

「先生、すみませんでした。とりあえず菜のことは俺に任せ  
 てください」

「ええ、お願いね。……私の方こそ、ごめんなさい。あなたた  
 ちにまで、いやな思いをさせてしまつて」

「そんなこと……。でも先生、菜の云うことも一理あると思  
 いますよ。いつでもそんな風に、自分を抑えていなくてもいい  
 んじゃないですか」

「汰一君……」

いつの時代でも、沙夜と武は歳の離れた間柄だった。そし  
 てそれだけでなく、いつも想いを通わせ難い関係に置かれて

いた。たとえば叔母と甥であったり、敵同士であったり。  
 そのため、沙夜は我知らず自分をセーブするところがあるの  
 は確かだった。

しかし、今ではそうした困難を乗り越えて結ばれたはず。  
 それをいつまでも遠慮していたのでは、今の幸せさえ壊してし  
 まう。菜や汰一が云いたいのはそういうことだった。だが。

「ありがとう。でも本当に、違うのよ。そういうことじゃない  
 の」

やはり沙夜は、少し困ったように微笑む。菜と違い、汰一  
 にはそれはただの強がりだとは思えなかった。

「……先生？」

「早く行ってあげて。ね」

「わかりました。それじゃ……」

「またね」

沙夜のことには気がかりだったが、菜を放っておくわけにも  
 いかない。汰一は菜を追って、身を翻した。

\*

地下鉄の改札で、汰一はようやく菜に追いついた。菜はま  
 だ泣いている。人目が集まるのを感じながら、汰一は菜をベン  
 チに座らせた。

「ちよつとは落ち着いたか？」

「うん……ごめんね、汰一ちゃん」

そう云いながら、まだ涙は止まる気配がない。汰一は菜の  
 隣に腰掛け、その顔を覗き込んだ。

「相変わらずだな。人のために泣いてばかりで」

「そんなんじゃないよ……。でも、どうしてなんだろう。……」

うつん、たけちゃんや先生の気持ちはわかるの。でも、そん  
 なの、優しすぎるよ。もっと自分の幸せのために、わがままに  
 なってもいいのに……」

「菜が云っても、説得力がないな」

「……え？」  
「二人のために、自分の気持ちを殺しているだろう？」  
「それは……それは違うよ。あたしは沙夜先生もたけちゃんも好きだもの。二人には幸せになつてほしい」  
「あの二人も、同じように考えていると思うよ」  
「……」  
「自分だけが幸せならいいっていうのであれば、他人のことなんか放っておけばいい。でも栞の好きな武も沙夜先生も、そういう奴じゃないだろ？」  
「……うん」  
「おい、栞っ!? しっかりしろ、栞!」  
熱に浮かされたようにしゃべり続ける栞の肩をつかんで、汰一は思わず乱暴に揺さぶってしまった。我に返った栞は、汰一の腕をつかみ、哀願するような口調で云った。  
「帰ってくるよね? たけちゃんは……帰ってくるよね?」  
「ああ、帰ってくるさ。約束したじゃないか、武は」  
「そう……そうだよね……。帰ってくるよね……」  
栞に言い聞かせながらも、汰一は自身もまた不安に蝕まれているのを感じていた。そして同時に、沙夜の言葉を思い出し、  
「彼を信じてる」  
不安がないはずがない。それなのに、どうして彼女はあんな風に笑えるのだろうか?

理由はわからないが、その沙夜の笑顔だけが、今の不安を打ち消してくれる唯一の希望のように、汰一には思えた。

「あの……すみません、高原万葉さんの病室は、どちらでしょう？」

病院の受付で、武は訊ねた。

とうとうここまで来てしまった。

どうするべきなのか、未だ答えは出せていなかったが、とりあえず万葉の無事を確かめる。すべてはそれからだ、と武は考えていた。

「高原さん？ まあ、あなた、ご親族の方？」

万葉の名を聞くと、受付にいた看護婦は喜色を浮かべた。

しかし、武の返事を聞くと、すぐに落胆を露にした。

「いえ……友人です。こちらに入院していると聞いて……」

「あら……そうなんですか。失礼しました。やはり身寄りはいらっしゃらないのね。可哀想に」

万葉の両親はすでに他界し、兄弟はもろろん、親族もいなかった。幸い資産家の家庭であったため、万葉が生活する分には困らなかつたが、万葉は遺産の管理を父の友人であった顧問弁護士に委ね、東京に出てきていたのだった。

ある日のこと。神剣を抱いた万葉が高原邸の玄関で倒れているのを、管理人が見つけた。おかげで身元はすぐにわかったが、意識を取り戻した後も、万葉は一言もしゃべらない。入院の手続きなどは件の弁護士が行ってくれたが、これからどうしたものか、途方に暮れていたのだという。

「だけど、お友達が来てくださったのなら、きっと喜ぶわ。元気づけてあげてください。三〇二号室です」

「……はい、ありがとうございます」

廊下を歩きながら、武は万葉の孤独を思った。天涯孤独の身で、ただ武に逢うことだけを願って……願って。千年の約束を、今生でこそ果たそうと。それなのに……。

武は立ち止まり、頭を大きく振った。

なにを考えている、武。同情で、万葉を救えるというのか。違う。同情なんかじゃない。

じゃあ何だ。愛だというのか。沙夜はどうなる？

違う……。

自問自答を繰り返す。

気がつけば、病室の前に立っていた。

やはり、逢うべきではない。

きびすを返そうとしたそのとき、沙夜の笑顔が、武の胸に甦った。

「あなたを、信じてる」

今ここで逃げ出せば、俺は二度と、沙夜の笑顔を正面から受け止められないだろう。

自分を送り出したその言葉に支えられて、武は、ドアに手をかけた。

\*

そこに、彼女はいた。

窓からの柔らかな光を浴びたその横顔は、やはり、息を呑むほどに美しい。まさに天女のように、透明感のある美しさだった。

けれど、今、その瞳にはなにも映っていない。ただ神剣を胸に抱いて、虚空を見つめている。

武は声をかけることもできず、ただその場に立ちつくしていた。

そのとき、ゆっくりと、万葉の首が動いた。彫像と化した武の方へゆっくりと面を向け、そして、胸を締め付けるほど悲しい笑顔を浮かべた。

「たかひさ……」

「……え？」

「鷹久…… やっと来てくれた」

「まよ……う……？」

「必ずまた巡り会える……そう、信じていたわ」

万葉の頬を、涙の雫が伝う。

その姿に、声に、心を震わせられながらも、武の胸では不安の影が大きく広がっていった。

「螢……なのか？ 万葉？ 俺を、覚えていないのか？」

「……？」

万葉は軽く首を傾げて、武を見つめた。なにを云っているのかわからない、という表情だ。私はこんなにもあなたを求めているのに、なにを云っているの？ あなたこそ、私を忘れてしまったの？ そう問いかけているかのようだった。

そのとき、聞き覚えのある声が、武に囁いた。

（今のママは、螢だったときの記憶しかないの）

「……え？」

慌てて病室を見回す。しかし、そこには武と万葉しかない。二人と、一振りの剣だけしか。

まさか？

武がそのことに思い当たると同時に、万葉の胸に抱かれた神剣が、まばゆい光を放った。思わず目をかばう武。やがて光はゆっくりと薄れていき、武が再び目を開けたときには、見知ったもう一人の女性がそこに立っていた。

「パパ……やっと来てくれたのね」

「天野先輩!? どうして？ パパって……ええ？」

そう、そこにいたのは、オカルト神秘学研究会部長・天野聡子だった。彼女は万葉と時を同じくして失踪し、彗をいたく悲しませたのだった。

その聡子が、今、忽然と姿を現した。あまりに予想外の出来事に、武はうるたえきってしまった。

「どうして……ことなんですか？ 先輩……？」

武は、相変わらず不思議そうに自分を見つめる万葉と、悲しげな表情を見せる聡子との間で視線をさまよわせた。

そのとき、武はあることに気づいた。神剣がない。万葉が

けして離そうとせず、常に抱いていた神剣・天叢雲が。

そして、そこには聡子が立っている。まるで叢雲が変化したように。

「まさか……」

武の中で、様々な出来事がつながり、形を現していった。螢との出会い。叢雲の誕生。自分を守り、一度は砕けた叢雲。転生。

「籬……？ 籬なのか？」

「そうよ、パパ……。やっと……やっと思い出してくれた……」

こらえきれず涙をあふれさせて、聡子 籬は武に抱きついてきた。そのまま本当に子供のように、泣きじゃくる。

武は戸惑いながらも、その体を受け止める。心を満たす暖かさ切なさ、それがまぎれもない真実であることを、武は悟っていた。

「ごめんね……パパ。つい嬉しくって」

少しして、薙は武から体を離れた。涙をぬぐいつつ、照れ笑いを浮かべる。

「いいんだ……でも、いつから気づいて？」

「初めて逢ったときから、知ってたよ」

「……本当に？」

「うん」

なにもかも知っていて、それなのになにも云わず、ただ待っていたのか。俺が思い出すその日まで。

どんなにかつらかったろう。薙が時折見せていた切なげな様子を思い浮かべ、武の胸は痛んだ。あんなに大切だった人たちのことを、どうしてこんなにも忘れてしまうのだろう。

「しょうがないわ……それが転生することだもの」

武の心を見透かしたように、薙が云った。そして万葉に向き直り、その手を取った。

「でも、今のママは違う……」

悲しみに沈む声。武は薙の最初の言葉を思い出した。

「螢の記憶しかない……そう云ったよな、薙。どういうことなんだ？」

「……」

すぐには答えず、薙は万葉の手を優しく握りしめた。万葉も穏やかな笑顔で、その手を握り返す。螢の記憶しかないのなら、聡子の姿をした薙のことも知らないはずだが、やはりその魂が自分の愛しいものだ、わかっているのだろうか。

「あのとき……ね。太祖と戦ったとき。覚えてる？」

「もちろん……。忘れるはずないよ」

万葉と沙夜、そして武をも黄泉に道連れにしようとした太祖。武と沙夜の間の力では、太祖は倒せない。万葉は武の中の「神」の力を自らに移すことで、闇を打ち払う力を発揮

し、太祖を黄泉に封じ込めたのだった。

「ママはもとも御剣の使い……「戦士」の器ではないわ。でもあのときは、私を手にして、自ら戦った。そして……最後には、「神」をその身に降ろした……」

そう、武の内なる神の力を自身で引き受けるということは、英霊を降ろして、神剣の真の使い手となることに他ならなかったのだ。

しかし、万葉はもともとその器ではない。器を越えて注がれた力は、魂をあふれさせてしまう。そうなること（あなたの魂はどこにもなくなってしまうの。死んだと同じことよ）

そう説明したのは、溼だったか。

「まさか……」

「そう。自分の器以上の力を宿して、ママの心は壊れてしまった……。ただ螢としてパパに出逢い、愛し合ったという記憶だけを残して……」

「そ……ん、な……」

武は、足下が崩れ落ちるような感覚を味わった。

なぜ。なぜ万葉だけが、こんな目に遭わなければならぬんだ。彼女にどんな罪があるというのだ。……罪を犯したのは、自分ではないか。

「俺の……せいなんだな……。俺が沙夜を選び……神として生きることを拒んだから……。だから……」

「パパ……」

武は全身を震わし、泣いていた。後悔では、なかった。ただ「なぜ」という思いが、胸を埋め尽くしていた。

なぜ、こんなことになる。いったいどうすればよかったというのか。誰かを選んだら、誰かを切り捨てるしかないのか……。

もう思いを言葉にすることすらできず、ただ唇を噛みしめて涙を流す武。

その頬に、ふと、白い指が触れた。

万葉が手を伸ばして、武の頬を包んだのだ。武の痛みを分かち合いたい。涙でいっぱい瞳が、そう語っていた。

「どうして泣いているの、鷹久？ そんなにっつらっつらな目をしてないで。私が……側にいるから……」

「万葉……!!」

武は、ついに万葉を抱きしめた。そうするしかなかった。

万葉の手が武の背に回され、きつく抱き返してくる。一点の曇りもない、愛と、信頼を込めて。

今この瞬間、俺は沙夜も万葉も、二人とも裏切っているのかも知れない。

そう思いながらも、しかし、武は万葉を抱く手を緩めはしなかった。

万葉を、救いたい。

傲慢かも知れない。自己満足かも知れない。だけどそれでも。万葉を、救いたい。

安らかな寝息を立てる万葉の髪を、武がそっと撫ぜる。先ほどまで、その手はずっと万葉の手に握られていた。

ようやく巡り会えた。その喜びに、万葉の寝顔は穏やかだ。武が病室に入ったとき、最初に見た人形のような生気のない顔とは比べものにならない。そのことに安堵しつつも、武の心は痛んだ。

「どうして……螢なんだろうな」

「え？」

武の呟きに、側に腰掛けていた薙が面を上げる。

「なぜ螢の記憶だけが、残ったんだろう。……やっぱり、俺に裏切られたことを、忘れたかったからなんだろうか」

苦渋に歪む武の横顔を見て、薙は目を伏せた。そして、小さく首を横に振った。

「うっん……そうじゃないと思う」

「……え？」

「本当なら、ママの心は完全に壊れてしまってもおかしくなかったの。それなのに、なぜ螢の記憶だけが残ったのか。それはきっと、ママが絶対になくしたくない想いだったから……じゃないのかな」

「……」  
「パパと出会えたこと、パパに愛されたこと、……そして、パパを愛したこと。これだけは、なにがあっても絶対に失いたくなかった。その想いが、かろうじて螢としての記憶だけを繋ぎ止めたんじゃないかって……私はそう思うの」

「薙……」

そうまで、自分を愛してくれたのか。武は目を閉じて、こみ上げてくる胸の熱さに耐えた。その様子を見つめていた薙は、思わず武の手を取った。

「薙？」

「パパ…… お願いよ。ママの側にいてあげて」

「……！」  
「パパの気持ちにはわかってる。でも、ママにはパパが必要なのお願。ママを見捨てないで」

見捨てる？ 薙の一言が、武の心を刺し貫いた。

誰も見捨てることなんてしたくない。しかし、誰かを選ぶということは、誰かを捨てるということではないのか。

結局、俺はここへなにをしに来たのだ。万葉を救いたい。ならば、沙夜を捨てるしかないのか？

薙の祈るような視線と目を合わすこともできず、武はただ立ちつくした。

\*

暗い廊下。そこに座り込んで、もうどれだけ時間が経っただろう。

あのあと、逃げるように病室を飛び出し いや、文字通り逃げてきたのだ。あまりにも重すぎる選択に耐えられず、武は背を向けて逃げ出した。

「すまない…… 少しでも時間をくれ」  
「パパ……！」

薙の悲鳴のような声が耳に残っている。どんなに失望した

だろうか。いや、むしろ自分を追いつめてしまったと、悔やんでいるかも知れない。だが、薙に問われるまでもなく、万葉の

元に残るのか、去るのか、それこそが最初に出さなければならぬ答えだったのだ。

「沙夜…… 俺はっ……」  
どうすればいい。その言葉が、喉に支えた。自分で決めなければいけない。そうわかっていたから。だけど。

\*

電話の音が響いた。

胸騒ぎがして眠れずにいた沙夜は、時計を見ながら受話器を取った。午前二時三一分。

「…… もしもし？」

「……」  
答えはない。しかし沙夜には、受話器を取る前から、それが誰からの電話かわかっていた。

「武？ …… どうしたの？」

「……」  
やはり答えはない。

沙夜はそれ以上問いかけようとせず、じっと武の言葉を待った。

沈黙が流れる。その沈黙の深さが、武の苦悩をありありと沙夜に伝えていた。

私のために、彼は苦しんでいる。そう思うと、沙夜は涙があふれそうになった。

「…… らないんだ」  
「…… らないんだ」

「わからないんだ…… もう、どうしたらいいのか…… わからない……」

嗚咽。受話器の向こうで、武が泣き崩れるのがわかった。

今まで一度も見せたことのない姿。年上の自分を「守る」と云ってくれた、どんな困難にも毅然と立ち向かった武が、

為す術もなく涙を流している。沙夜は愛しさと切なさに胸が押しつぶされる想いだった。

今すぐ逢いたい。逢って、抱きしめてあげたい。私の胸で、泣いてほしい。ひとりぼっちで泣いていた私を、あなたがあた

たかい手で包んでくれたように……  
けれど、今はそれが叶わない。言葉だけしか、彼にあげられるものがない。

「武の信じる通りにして」  
それなら……

「……え……？」  
「あなたがそうすべきだと信じたことを、やればいいの。迷うことなんてない」

「俺が……信じたこと……」

「そう、それでいいの。……私は、あなたを、信じているから……」

「沙夜……」

正しい答えなんか見つけなくていい。沙夜はそう云っていた。あなたが選んだ道を、私も選ぶから。信じてる。

武は涙を拭くと、微笑みを浮かべた。そこには強い決意があった。そしてそのことは、沙夜にも確かに伝わっていた。

「ありがとう……沙夜。ごめんな」

「ううん、私の方こそ……。電話くれて、嬉しかった」

「俺も……じゃあ、おやすみ」

「おやすみなさい」

恋人たちの当たり前のような挨拶を交わして、二人は受話器を置いた。

武は、力強い足取りで、万葉の病室へ戻る。

そして、沙夜は、その場にくずおれて、静かに涙を流し続けた。その面には、しかし、至福の表情があった。

病室のドアをそっと開ける。

薙はベッドにもたれかかって寝てしまっている。泣いていたのだろうか？ 武はまた少し心が痛んだ。

そして、万葉は上体を起こし、薙の頭を優しく撫でていた。まさに母が娘を愛おしむように。

その瞳には未だ悲しみの色が深かったが、武が帰ってきたことに気づくと、花のように微笑んだ。

「お帰りなさい。……よかった、帰ってきてくれて。目を覚ましたらあなたがいなかったから、私、また夢を見たのかと思っちゃった」

「……」

「でもね、薙が『パパはすぐ帰ってくるから』って云ってくれたから、安心できたわ」

……嘘だ。安心なんかできるはずがない。記憶をなくしていても、今の武が鷹久とは違うことに、万葉は気づいているはずだ。そして自分が螢ではないことも。今の状況に違和感を感じ、不安な気持ちでいっぱいのはず。

そしてそんな万葉が頼れるのは、武と薙しかいないのだ。

武はまた少し迷った。けれど、心はもう決まっている。これ以上ためらえば、周りの誰もを傷つけるだけだ。

優しい、染み通るような笑顔を浮かべて、武は万葉に近づいた。万葉が小首を傾げて、武を見る。

「……ちよっと、散歩しようか」

「散歩？」

万葉は薙の方をちらっと見た。薙を置いていっていいのか、少し迷った様子だったが、こくと頷いた。

武は万葉を抱き上げる。軽い。この華奢な体に、どうしてこんな運命が課せられたのか。

万葉を腕に抱いたまま、武は病室を出た。万葉が切なげ

に、武の胸に頬を寄せた。

\*

「わあ……」

病院の裏手には、小さな湖が広がっていた。周りには木々が生い茂り、心和ませる空気に満ちている。

そしてなにより、螢と鷹久、二人が初めて出逢った場所に似ていた。万葉が思わず感嘆の声を上げたのは、そのせいだったに違いない。

武もそのことに気づいていたが、なにも云わず、木陰のベンチに万葉を降ろした。

「寒くないか？」

「ええ……大丈夫」

武は万葉の隣に腰掛け、しばらくは無言で湖面を見つめていた。万葉もやはり黙ったままで、そんな武の横顔を見つめている。

そうして、どれぐらいの時間が経ったのか。武は万葉に向き直り、正面からその瞳を見つめた。

「螢……いや、万葉。これから俺の話することを、よく聞いてほしい」

「……」  
万葉は答えない。ただ武のまつすぐな視線を受け止め、その一言一句を聞き漏らすまいとしているようだった。

「俺たちが出逢ってから、長い……長い年月が、流れた。今の俺は、安倍鷹久じゃない。御門武だ。同じように、君の名は高原万葉……。螢じゃない」

「武……万葉……」

「そっだ」  
いったん言葉を区切り、武は立ち上がった。半歩前に踏み出し、再び湖面に視線をさまよわす。万葉もまた、武の動きをじっと目で追った。

「そして……今の俺には……」

「……」  
武は振り向き、もう一度万葉の瞳を見つめた。もう、逃げないと決めたから。

「今の俺には、愛しているひとがいる」

「……」  
万葉の表情に、変化はない。武のその言葉が、どれだけ衝撃を与えているのか、伺い知ることはできなかった。それでも武は、目を逸らさずに話し続けた。

「そのひとの名は、常磐沙夜。俺たちの担任だった先生だ。……覚えてないか」

風が吹く。万葉の長い髪を風がなぶっていく。万葉は左手を挙げて、髪を押さえた。だからその一瞬の表情が、武にはわからなかった。

「彼女は俺と同じ血の宿命に苦しんでいた。自分は誰からも愛されるはずがないと、ひとりぼっちで泣いていた。俺はそんな彼女を、ずっと守っていきたくと思ったんだ。だから……」

だからもう、お前とは行けないんだ。  
その一言が、どうしても言葉にならなかった。

万葉はやはり無言のまま、武の瞳を見つめ返している。何度も目を逸らしてしまいうるようになるのを、武は唇を噛みしめて耐えた。

「憎んでくれていい。お前を裏切ったこの俺を。そして俺たちのために、心まで失ってしまったお前を、もう一度捨てようとしているこの俺を。だけど俺は……嘘をついて、お前を抱くことはできない。そんなことをしたら……俺たちの千年の絆が……すべて嘘になってしまう……」

いつの間にか、武は泣いていた。涙を拭おうともせず、万葉に語り続けた。

「だから、俺は……俺は……」  
その続きが、どうしても言葉にならない。別れを告げるその言葉が。

これまで、武はずっと万葉の想いから逃げていた。彼女を裏切ったという後ろめたさから、万葉に冷たく振る舞い続けた。

しかし、今、初めて武は万葉と正面から向き合おうとしていた。彼女の思いを、彼女の傷みを、受け止めなければ。そうしなければ、なにも新しく始められはしない。

そしてそのためには、沙夜への偽りのない愛もまた、示さねばならなかった。たとえそのことが、万葉をさらに傷つけるとしても。その傷もまた、武自身が背負わなければならなかった。

だから。万葉と別れる。そのことから、始める必要があった。

「俺は……」

血のにじむほど拳を握りしめて、まさに血を吐く想いで言葉紡ぎだそうとした、そのとき。

「もういいのよ、武」

風が天女の囁きを運ぶ。万葉は乱れる髪をまた手で押さえながら、微笑んだ。

その微笑みの優しさを、穏やかさを、切なさを、悲しさを、武は生涯忘れなかった。そして彼女の愛を。

「私が愛した人が、あなたでよかった」

……すまない、そう云いそうになるのを、武はこらえた。謝ってなんかほしくないはず。いや、なぜ謝る必要があるのかと、万葉は云うだろう。

ただ腕を伸ばして、万葉を抱きしめた。万葉もまた武の背に手を回す。

ほんの束の間の抱擁。

体を離し、最後にもう一度だけ見つめ合った後、武は身を翻した。

万葉はその後ろ姿を見送っている。  
涙は、なかった。

翌日。帰りの電車の中で、武は薙のことを思い出していた。

あの後、木陰から薙が姿を現したのだ。

「とってもパパらしいけじめの付け方だったわね」

「……見てたのか？」

「バッチリ」

おどけて見せる薙。けれどその顔はすぐに涙に歪んで、武の胸に顔を埋めた。武はその頭を抱き、髪を優しく撫ぜた。

「すまない、薙……俺は、行くよ」

「わかってる……。ううん、最初からわかってたの。パパがどうするか、なんて……。私の方こそ、わがまま云って、ごめんなさい」

「わがままなのは俺だよ。父親失格だな」

「そんなことない。薙のパパはパパだから……」

そこで薙は顔を上げて、武の目を見つめた。

「離れていたって、パパはパパよね。そうでしょう？」

「ああ、もちろんだよ」

武の言葉に、薙は輝くような笑顔を見せた。そして、ぱつと武から体を離すと、万葉の方へ向かって走り出した。

「ママのことは心配しないで。私がついてるから。……お幸せにね、パパ！」

「あ……薙！」

思わず呼びかけてしまう。薙は足を止めて、振り返った。

「なに？」

「その……。いつでも遊びに来いよ。栞も……。喜ぶと思う」

「……そうだね……」

少しだけ、寂しそうな笑顔を薙は見せた。その表情に、失言だったか、と武は後悔したが、次の瞬間には、弾けるような笑顔が目の前にあった。

「いつかまた……。ママと一緒に会いに行くわ」

「ああ…… そうだな、いつか……」  
いつかきつと、そんな日が来る。そのために、今日はこうして別れていくのだから。

「じゃあね、パパ」

大きく手を振って、薙はまた走り出す。その後ろ姿を見送って、武は新しい一歩を踏み出した。

\*

駅のホームに、電車が入ってくる。

ホームには、沙夜が一人で立っていた。栞と汰一も迎えに来ていたが、少し離れた場所から沙夜を見守っていた。

やがて電車が止まり、乗客が次々と降りてくる。その中に武の姿を見つけ、沙夜は小走りに近づいた。武も沙夜に気づき、ホームを走ってくる。

再会を果たした恋人たちは、しばしの間、なにも云わずただ見つめ合っていた。そして武が微笑んで、云った。

「…… たいま」

沙夜もまた、微笑みを返す。この沙夜の笑顔もまた、武にとつて終生忘れられないものとなった。この笑顔があればこそ、俺は帰ってこれたのだと。

「お帰りなさい」

ほかに云うべき言葉はなかった。武は帰ってきた。約束を果たして、それがすべてだった。

そして、その沙夜の笑顔に、太一は感嘆の溜息をついた。それから、傍らに立つ栞に聞かせるでもなく、呟いた。

「やっとわかったよ。先生が、どうして武のことをあれだけ信じられるのか。先生は、武のすべてを宥なだめている。だから裏切りだとか、そんなことには意味がないんだ。それが彼女の『信じる』ということ……それが彼女の、千年の愛だ」

たとえば武が沙夜を手にかけてようとしたりしても、沙夜は笑顔で逝くだろう。あの雪の日の少女のように。

それは諦めや自己犠牲の精神などではない。ただ武だけが、沙夜の生きる意味だから。

「千年の愛……か」

その言葉を噛みしめるように呟くと、栞は一つ大きく伸びをした。

「あーあ、かなわないなあ…… さ、行こ、汰一ちゃん」

云うや、栞はもう走り出していった。慌てて汰一がその後を追う。

「たけちゃん、お帰りい」

「おう、なんだ、お前らも来てたのか」

「なあに、せっかく迎えに来てあげたのに、その言い草……先生も！ 生徒の前でそんな堂々と腕組んだりしていいんですか？」

「いいじゃない、今日ぐらいは…… ねえ？」

沙夜が甘えた声で、武を見上げる。武は照れて頭をかくばかりだ。

穏やかな風景。

彼らの本当の未来が、ここからはじまる。

了

## あとがき

テーマは「私的・再臨詔」です（笑）。  
沙夜っち派の私からしても、沙夜シナリオでの主人公の万葉への仕打ちはあんまりだと思っので、男だったらきちっとけじめつけんかい！というのが発端でした。  
あともうひとつ表現したかったのが、沙夜っちの愛の形です（こっばずかしい（笑））。信吾に殺されそうになっても「だいすき」と云った観樹、武に「逃げてもいいじゃない」と云った沙夜っち。彼女の愛というのは相手の全肯定であり、すべてを宥すことなんだろうなあと思います。それは「裏切られてもいい」ということじゃなくて、裏切ることさえ宥してしまおうという……うーん、どこが違うと云われると困るんですが（笑）。最後の汰一の台詞で「裏切りとか、そういうのは意味がない」といっているのはそのことです。  
この汰一の台詞がまた説明的で、なんとかならんかなーと苦慮したんですが……正直、蛇足だったかもしれませぬ。というわけで、この二つが、うまく表現できているといいのですが。  
よろしければご感想などお聞かせください。

二〇〇〇・七・一三  
八神大輔